

中村孝義 ● Takayoshi Nakamura

推薦 かつてニコレヤランバルなどといった名奏者たちと並び称せられ、一世を風靡したフルート奏者グラーフによるごく最近の録音がリリースされた。私は以前から、前二者と比べてもグラーフの演奏が好みで、そのバッハやヘンデルのソナタの録音（特に旧盤）、さらには彼自身が吹き振りをしたモーツァルトの協奏曲録音などは、未だに私の愛聴盤の一つである。彼が生まれたのは1929年とのことだから、このアルバムが録音された時（2019年8月）は、なんと90歳。その年で演奏活動を続けていること自体が驚異なことだが、最初のヘンデルを聴き始めてさらに驚いたのは、それがいかにも潑刺とした

躍動感を持った演奏で、とても高齢者の演奏とは思えないということだ。相変わらず格調の高さと凛とした表情を持った演奏は、聴いていて思わず襟を正したくなるほどである。しかしさらに驚きなのは、イベールの無伴奏フルートのための小品でも、無伴奏だからよりはっきりわかるのだが、彼のかつての膨らみを持ったやや太めの豊かな音や、それを駆使する技術にもほとんど衰えが感じられないことだ。しかも表現には一瞬も緊張感を失わない艶と張りがあり、彼本来の美質が見事に発揮されている。つづくヒンデミットやF・X・モーツァルト、ジョリヴェやマルティヌーのソナタもなんと豊かな生命力に富む演奏であることか。これら全ての演奏がライヴ録音なのだから、その瑕疵のなさには驚くほかない。ともあれ驚きと喜びに満ちた一枚だった。

峰尾昌男 ● Masao Mineo

【録音評】2019年のライヴであるが、常にワン・ポイントでの収録を行っているこのレーベルでもかなり離感がある。録音はもう少し明瞭度がほしいが、大きな空間の表現も目新しい。最新のライヴが聞かれています。〈92〉

ようにも感じられる。反面、ドライなヒンデミットやさり気なく変拍子が仕込まれたマルティヌーでは、いくぶんぞんざいにも聞こえる融通無碍な語り口が、旋律を自然に歌わせることに通じて、愛らしさとも言える魅力の曲に聞こえることになったのが見事である。全体ではこのふたつのソナタがもっとも美しい聴きどころになったと言えようか。また珍しいフランツ・クサヴァー・モーツァルトの《ロンド》は穏健な作風ながらフルートがよく活躍する小品で、この盛りだくさんなアルバムに華を添えている。ピアノを務める田原も、楽器を十分に鳴らしつつ表情豊かなフルートによく応えて秀逸である。ヘンデルのソナタでは響きの薄いレアリゼーションを、妙に飾り立てずに簡潔に音にしているのも好ましい。



LEGEND in FLUTE
Masao Mineo
Peter Hakaraiti
THE RECORD GETTOTSU
特選盤

■ グラフ / レジェンド・イン・フルート (ライヴ・イン・コンサート 2019)

【全6曲】
(詳細は巻末新譜一覧表参照)
ペーター＝ルーカス・グラーフ (fl) 田原さえ (p)
【マスター・ミュージック】MM4506
¥3300

相場ひろ ● Hiro Alba

推薦 ペーター・ルーカス・グラーフはこのライヴ録音が成された当時すでに満90歳を越えていたのだが、それがにわかには信じられないほどに安定したフルートを聴かせてくれる。冒頭に収められたヘンデルから、豊かで朗々と響きと堂々とした語り口で聴き手を魅了するのだ。ジョリヴェの《呪文》第4曲で聴かれるように低音域は力強く鳴り、マルティヌーに頻出する高音域の連続も、不安を感じさせることはない。もちろん現代の若い名手たちと比べればそれなりに瑕はあって、長大なフレーズでは息継ぎが多かったりするし、またイベールの《小品》あたりだと、ひとつひとつの音の扱いがやや雑である